

報告

こどものためのあかりミュージアム

「おしごとのあかり：あかりで知るむかしのおしごと」

廣瀬 由子

HIROSE Yuzu

筑波大学大学院 人文社会ビジネス科学学術院 人文社会科学研究群
人文学学位プログラム歴史・人類学サブプログラム 博士前期課程

はじめに

長野県上高井郡小布施町の日本のあかり博物館（以下、「当館」）は、電灯以前の灯火の移り変わりを知ることのできる様々な灯火具を展示している。当館は国の重要有形民俗文化財「信濃及び周辺地域の灯火用具」963点を収蔵、展示する灯火具専門館として1982（昭和57）年に開館して以来、あかりの歴史を伝える活動を続けてきた。夏季の「こどものためのあかりミュージアム」では、あかりの歴史に楽しくふれられるような視点からこども向けの展示がなされている。

筆者は高校3年生のとき、当館で、友人2人とワークショップ「昔のあかりで見る浮世絵」⁽¹⁾を企画し、開催する機会を得た。当館は、このような学生の意向を尊重し、主体的な取り組みを受け入れてくれた。それが縁となり、昨年は博物館実習生として「あんどん皿と花鳥風月」⁽²⁾を企画した。そして、開館40周年を迎える今年は「しごと」をテーマとした企画を提案し、学芸員の指導を受けながら形にすることができた。会期は2022年7月1日（金）から9月27日（火）までの約3か月で、当館2階展示室で開催された。本稿では、当企画展の展示内容について報告する。

I 「おしごとのあかり」

「こどものためのあかりミュージアム」は2002（平成14）年以来、例年7月から9月にかけての夏休み期間に開催されている（2020年度は新型コロナウイルス感染症流



写真1 チラシおもて面



写真2 チラシうら面

行の影響で開催せず) こども向け企画展である。日本各地の博物館では、行灯やランプと電灯の明るさを比較する展示やワークショップが開催されてきたが、こども向けの灯火具展示を断続的に行ってきた点に当館の特徴がある。

近年の展示を概観すると、テーマ別に大きく以下の三つに大別することができる。

1. 日本のあかりの歴史をこども向けに分かりやすく総覧する展示

(「できた! あかりの道具年表」2012年、「くらべてみよう 300年前→100年前」2016年、「調べてみよう むかしのあかり」2018年など)

2. 時代ごとのあかりに注目した展示

(「油のあかり」2007年、「ろうそくのあかり」2011年、「木と土のあかり」2017年など)

3. 灯火具のデザイン性や利便性をテーマとした展示

(「あかりの国のどうぶつまつり」2006年、「はこぶ 移動するあかり」2015年、「たたむ しまう かたづけ上手なあかりたち」2013年など)

これら一連の展示は、体系的・時代・デザイン・利便性などの様々な切り口から館蔵の灯火具を展示することで、昔のあかりの歴史を伝えてきた。これらのテーマの要素を横断的に捉えようとすれば、スイッチ一つであかりをつけることができる現代とは異なり、火が暮らしに身近にあった時代に、いかに火を便利に安全に扱うかといった、人びとの不断の創意工夫をみることができるだろう。

夜の漁のための集魚灯、鉄道で使われた合図灯や、商店や食堂の看板代わりの行灯や華やかなランプ。このように灯火具が使われていた場面に着目すると、昔から人びとの「しごと」をあかりが支えてきたことが分かる。展示のコンセプトを考えるにあたっては、来館者の立場としての筆者自身の関心をよりどころとして発想した。展示されている灯火具の一つひとつが、だれが・いつ・どこで・どのような目的で使っていたのかという筆者自身の疑問を、「しごと」というテーマでつなぎ合わせることで、夏休みのこどもたちの学びにつながるように企画した。

昨年と同様、資料選定から展示構成、ポスターやチラシ、キャプション案の作成にあたっては、初案の作成を任された。チラシに関しては構成や内容を初案として提案し、博物館側で描画ソフトを用いて校正いただいた。チラシやパネルで用いたイラストは全て筆者自作によるものである。

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、展示企画案の提出やキャプション文案の修正などの学芸員とのやりとりは全て電子メールや電話を介して行われた。

II 展示構成

日本のあかりの歴史を体系的に把握することのできる常設展とは異なる視点から、人とあかりの関係性を伝えられるよう検討を進めた。

展示資料脇には必要に応じてイラストを付した解説パネル(図1)や、灯火具が使われた場面を想像できるような写真パネルを設置することによって、灯火具の使用状況が想像できるように心がけた(写真3)。イラストは、キャプションの文字情報を補うものとする学芸員の指導を受け、描画ソフト

を用いて筆者が描いたものである。児童向け歴史書で掲載されているイラストを参考に、須高郷土史研究会発行の写真集を参照しながら地域の風俗を可能な限り反映した。

展示構成は、灯火具が使われていた「場」ごとに以下に示す八つの章で構成した。それぞれの章には展示内容を端的に示した副題を付し、学芸員の指導を受けながら、こどもたちに分かりやすいような表現で作成した。主な展示内容は以下の通りである。

(1) 「農業のあかり～自然の植物で家を照らす～」

松あかし、つりなべ、竹あかりなどの石や木、竹を利用したあかり6点を紹介した。昔の人びとは暮らしに身近な自然からあかりを得ていたということを展示の冒頭で説明した。電気のなかった時代、外が暗くなると小さなあかりで作業をしていたことを説明するパネル「夜なべしごと」を設置した。竹あかりは夜なべしごとのみに使用していたわけではないが、キャプション初案の筆者の文章が「竹あかり＝秋山郷で夜なべしごとの際に使ったもの」となってしまったために、誤解をもたらしかねない文章は避ける必要があるといった指導をいただいた。

(2) 「漁業のあかり～魚をあつめるともし火～」

鵜飼で使われた大きな篝やイカ釣り漁船の集魚灯など5点を展示した。特に鵜飼の篝については、「長良川鵜飼」の写真（一般社団法人岐阜県観光連盟提供）や解説パネルを設置し、鵜飼という仕事の理解につなげるようにした（写真3）。篝は常設展で展示されているものを展示させていただいた。自立しない篝は、横幅1メートルを超える釣り台を使用しなくてはならない。それまで筆者は、壁に取り付ける形式の解説パネルを想定していたが、こどもたちの鑑賞になるべく圧迫感を感じさせないようにという学芸員のアドバイスを受け、置き型のパネルに修正を行った。また、当初「篝」の字に振り仮名を付す予定であったが、難しい漢字に関しては、ひらがな表記にするなどのキャプ



図1 パネル「鵜飼」



写真3 鵜飼の篝展示風景



写真4 トテ馬車ランプ展示風景



写真5 六角ちょうちん展示風景

ション表現の工夫についても指導をいただいた。

(3) 「作業のあかり～自由に持ちはこべる光～」

温泉掘りや井戸掘りなどの暗所での作業を照らしたあかり6点を展示した。副題に「自由に持ちはこべる光」としているが、灯火という火を狭い場所での作業に用いていたことに改めて気づかされる。本展示では石油採油場で用いられた安全灯を展示しているが、安全に火を持ち運ぶことが当時の人びとの意識の中に強くあったことがうかがえる。したがってカンテラに加えて現代の懐中電灯を共に展示することで、いかに現代の私たちが光を安全に持ち運ぶことを「当たり前」に感じているかをこどもたちに理解しやすいように工夫した。

(4) 「のりもののあかり～交通安全をささえた火～」

乗合馬車のランプや、鉄道で使われていた合図灯など5点を紹介した。あかりが、単なる照明としての機能を有するだけでなく信号を伝達する機能を持っていることを、こどもたちに考えてもらう仕掛けを試みた。また、本展示では明治末頃から大正時代にかけて豊野一須坂間を走っていた乗合馬車「トテ馬車」で用いられたランプを展示している。パネル「想像してみよう」では、「トテ馬車のあかりはなんで必要だったのだろう」と問いかける形式を採り、交通安全のあかりとしての理解につなげた(写真4)。

(5) 「銀行のあかり～お金の取り引きを照らす～」

1881(明治14)年に設立された「小諸銀行」(長野県小諸市)で使われた石油ランプ5点を、現存する建物の写真(長野県小諸市教育委員会提供)とともに展示した。明治10年代後半に竣工した「小諸銀行」は今日まで現存している。写真資料とともに明治の銀行内部を照らした石油ランプを展示することによって、現代のこどもたちの「銀行」というイメージとは異なる当時の銀行のたたずまいを表現した。

(6) 「役者のあかり～役者を輝かせたともし火～」

役者を照らすスポットライトの役割を果たした「つらあかり」や芝居小屋で使われたカンテラランプなど4点を紹介した。「つらあかり」は、蠟燭を立てた箱に細長い棒をつけたもので、江戸時代の歌舞伎において役者を照らすあかりとして用いられていた。本展示では、歌川豊国（3代）の『其由縁十二時斗 戌ノ刻』（1859（安政6）年）を展示し、「つらあかり」のほかに蠟燭を立てて上演をしている江戸時代の劇場の様子を紹介した。現代の劇場とは異なり、役者の姿をゆらぐ蠟燭の焰が照らす姿は逆に効果的であったことだろう。

(7) 「旅館のあかり～さまざまな光でおもてなし～」

「旅館のあかり」では、ホテルや旅館で使われた燭台や石油ランプなど8点を写真資料とともに展示した。本展示では、軽井沢町教育委員会ならびに下諏訪町立図書館、そして下諏訪温泉桔梗屋様より画像提供をいただいた。当時使われていた旅館の様子を可能な限り来館者に紹介できるよう資料集めに苦勞した。また、来館者が主体的に灯火具の使われていた時代を想像してもらう仕掛けとしてパネル「想像してみよう」を、本展示のほか各所に設置した。当時の商人たちがなぜ枕と行灯を携帯する枕あんどんを旅に持ち出したのかを自由に想像してもらえるように、「問いかけ」方式のパネルとしている（パネル「想像してみよう：なんで『まくら』と『あんどん』を旅にもっていくの？」）。このような問いかけは、展示構成を検討していく際に度々生じた筆者自身の疑問点を、学芸員の指導のもとに再構成したもので、来館者と一緒に考えていきたいという思いから設置した。

(8) 「商店のあかり～商売と町をみまもる光～」

呉服屋、鋳掛け屋の職業についてまとめた解説パネルを設置し、8点のガラスちょうちんなどの店先のあかりを紹介した。本展示においても、パネル「想像してみよう：『火の要慎』ってなんでわざわざ書いたのだろう？」を設置した。せんべい屋で使われていた手さげ提灯には、「火の要慎」の文字が記されている。「火の要慎」の文字を提灯になぜ書いたのかを問いかけ、自由な発想をうながした。

(9) 「飲食店のあかり～食事をたのしむ心くばり～」

料亭で使用された華やかな行灯や石油ランプ20点を展示した。版画とともに明治時代・大正時代の料亭、食堂の当時の写真を紹介することで、可能な限り当時の様子を想像してもらえるような仕掛けを心がけた。また、本展示では当館所蔵の絵画資料の活用を目指した。菊川英山の「たんころをもつ女性」（1844（弘化1）年）には、火が消えないよう、袖で風から火を守る江戸時代の女性の様子が描かれている。このような絵画資料からは、たんころを使用する上での日常的なふるまいの一端

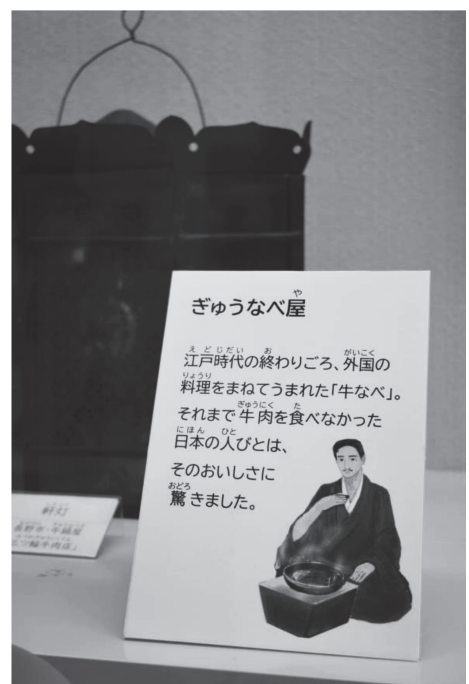


写真6 軒灯展示風景



写真7 展示室内風景

をみることができる。絵画資料にこのような有効性を感じられた一方、本展示の準備作業を通じて浮世絵と展示物のつながりを子どもたちに理解してもらい難しさを感じた。当初、そのほかにも展示を希望していた浮世絵があったものの、「飲食店であかりがどのように使われていたかを見る浮世絵」を展示する上では、なるべく描かれている灯火具と同じ形態のものを展示する必要があるという学芸員の助言があり、展示する浮世絵の選定に、より注意を向けることができた。

以上の九つの章からなる章立てによって、かつて灯火具が使用されていた状況を総体的に概観することのできるように構成を考えた。このように、それぞれの灯火具の機能性、色や形、デザイン、そして光に注目すると、昔から人びとの作業や仕事に寄り添ってきたあかりの特性をみることができると考える。

Ⅲ ワークシート

展示室入り口には、2枚のワークシート（図2）を設置した。ワークシート①「おしごとのあかり」は、小学校低学年の子どもたちでも取り組むことができるよう展示資料とイラストを線でつなげる形式とした。ワークシート②「あかりのことは、さがしてみよう！」「なにがはいっているのかな？」は、展示されている資料の理解を助けるもので、キャプションや資料の特徴をもとに解いてもらう形式を採っている。それぞれの問題の回答に用いる言葉は、「火」という漢字以外はひらがな表記とし、振り仮名を適宜振るなど幅広い年齢の来館者に対応できるようにした。

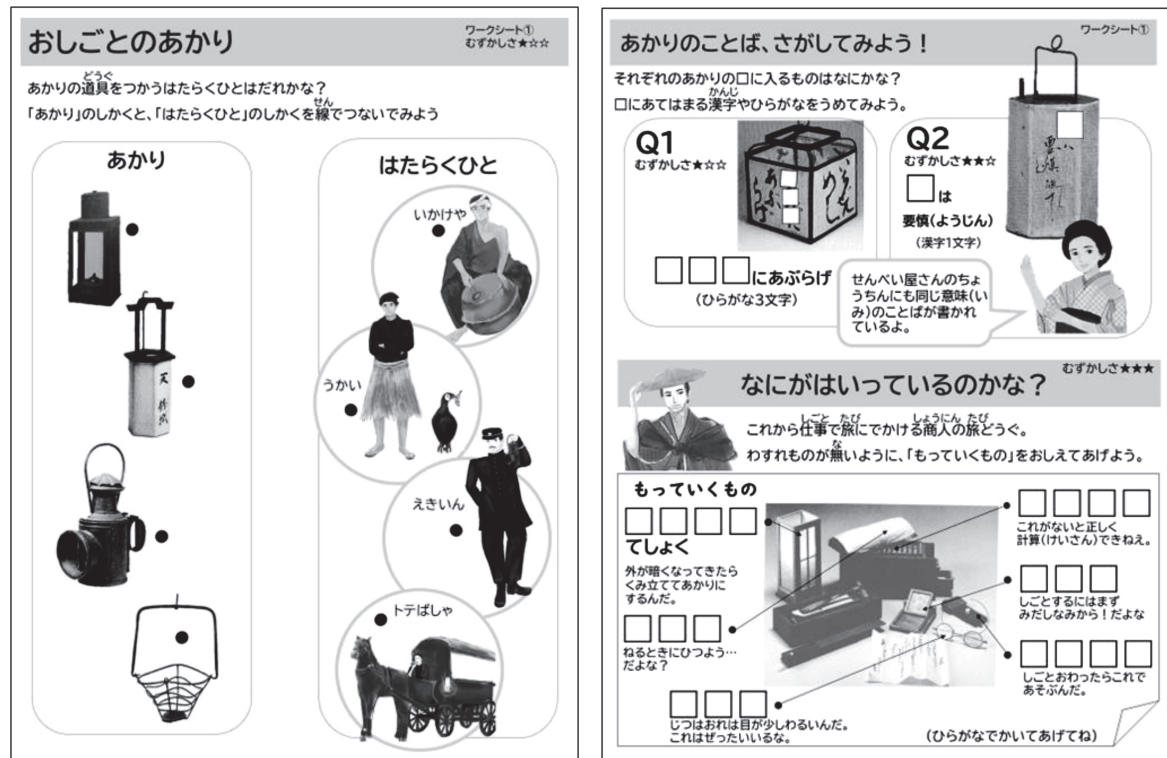


図2 ワークシート2枚 (A4版)

おわりに

今回の企画展を振り返り、気づきを述べて結びとしたい。

まず第一は、参加してくれた子どもたちと博物館職員との交流である。新型コロナウイルス感染症拡大が続く中ではあるが、当館の皆さまのご理解をいただき、企画展の開催期間中、1週間という短い期間ではあったが、アルバイトとして勤務しながら、来館者の反応を知ることができた。ワークシートは2階企画展示室に置いてあり自由に参加する仕組みになっていた。ワークシートに挑戦した子どもたちは1階展示室で答え合わせをすることになっているが、その際、「難しかったけど楽しかった」(小学1年生)、「おもしろかった」(中学1年生)という感想をいただき何よりの励みになった。また、枕あんどんのパネル「考えてみよう」で、親子で答えを考えていただいたご家族が受付で話しかけてくださることもあり嬉しかった。解説パネル「考えてみよう」では、「答え」をあえて書かないことで主体的な子どもたちの学びにつなげる狙いであったが、親子で会話をしながら答えを考えている様子を見て、対話型の学びにもつながっていたことは想定以上だった。この対話型の学びは受付での答え合わせによって支えられている。常設展においても、子ども向けのワークシートが設置され、実際に参加した子どもたちは受付で答え合わせをするという取り組みは長らく続けられてきた。大規模な館になると、置き型のワークシートを参加者自らが採点するのが一般的である。これに対して当館では来館者のワークシートを職員が採点し、参加してくれた子どもたちをねぎらいながら会話する姿が新鮮だった。

第二は、「分かりやすさのむずかしさ」である。今回、資料選定から展示構成、ポスターやチラシ、キャプション案作成を任せていただいた。このような機会をいただくことで筆者は、展示計画が

どのような思考錯誤を経て来館者の眼にふれるのかを学ぶことができた。特にキャプション案については「小学4年生に分かるような」言葉の使い方が難しく、当館学芸員によれば「かんたんな説明ほど難しいものはない」とのことと何度も書き直すこととなった。また過去について語ることは同時に説明するという責任を伴うこととなる。説明を平易にすればするほど、説明の解釈の幅が広がる可能性もある。筆者はこの時改めて情報の受け取り手を強く意識した。また今回の企画では、キャプションだけでなくイラストも同時に作成したために、言葉や絵で「過去」を表現することの持つ力と難しさを感じることができたといえる。このような学びは主体的に企画を創り出そうとした結果によるものが大きい。博物館という場は、学生にとって表現することのトレーニングを積む場としての可能性を持っているのではないだろうか。今後も、学生の主体的な企画をうながし、それを積極的に受け入れる博物館が増えることを期待する。

謝辞

本企画展開催にあたり、多くの方々から画像資料提供などのご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。
軽井沢町教育委員会 生涯学習課文化振興係、岐阜県観光連盟、下諏訪温泉 桔梗屋、下諏訪町立図書館、食堂 東京庵、長野県小諸市教育委員会 文化財・生涯学習課、百年料亭 宇喜世（敬称略、五十音順）

また、本企画展は日本のあかり博物館の豊富で多様なコレクションと長年にわたる研究活動、そして館の皆さまのご理解、ご教示なしには実現しませんでした。末筆ながら、学芸員 宮坂瑞紀様の親身なご教示と、展示の設営にご協力いただきました原様、吉田様に、心より御礼申し上げます。

注

- (1) ワークショップ「昔のあかりで見る浮世絵」 2017年10月、女子美術大学付属高校在学時に当館でワークショップ「昔のあかりで見る浮世絵」を企画した。1階展示室をお借りし、暗幕を張った低照明空間の下でLEDろうそくのあかりで浮世絵を鑑賞するワークショップを友人2人とともに開催した。開催にあたっては照明デザイナーや浮世絵職人へのインタビューを行い、パネル展示を行うなど照明が作品鑑賞に与える効果についてワークショップ開催を通じて考える機会となった。活動報告は2018年3月に照明学会主催のLux Pacifica（ルクスパシフィカ）でのポスター発表を通して行った。
- (2) 「あんどん皿と花鳥風月」 本展示と同様に当館の「こどものためのあかりミュージアム」企画展。会期は2021年7月9日（金）から11月23日（火・祝）までの約4か月半で、2階展示室で開催した。調査報告を本誌前号（『非文字資料研究』25号）に投稿、査読済。

参考文献

- 須高郷土史研究会編 1981 『須坂・小布施・高山・若穂百年史』長野：須坂新聞社。
澤宮優・平野恵理子 2016 『イラストで見る昭和の消えた仕事図鑑』東京：原書房。
田中力 2005 『昔のくらし』東京：ポプラ社。
本郷和人 2021 『仕事の歴史図鑑 1』東京：くもん出版。
須藤功編 2016 『道具からみる昔のくらしと子どもたち 1』東京：農山漁村文化協会。
和の技術を知る会 2016 『子どもに伝えたい和の技術 5』東京：文溪堂。